

源氏物語と舞台である京都とは、切っても切れない関係にある。そこでこの稿においては、車を使って源氏物語の旅をすることにしよう。が、詳しく書き出すとキリがないので、要点のみをかいつまんで述べていくことにする。市内・京内については歩いてまわれよう。より詳しくは、以下の三冊を主にみられたい。

・『京都源氏物語地図』（社団法人紫式部顕彰会 編集。思文閣出版。二〇〇七）…廉価。

・『源氏物語の地理』（思文閣出版。角田文衛・加納重文編。一九九九）…本格的な書。

・『源氏物語を歩く』（京都新聞社編。杉田博明 著。光風社出版。一九八六）…一般向き。

なお、傍線を付した語は、源氏物語に関連する建物、施設、社寺、仏閣などを示す。

では、地図を片手に、まず始発は、大原野神社から。有名な古今八七一「大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひいづらめ」（雑上「二条後の…大原野に詣で給ひける日、よめる」在原業平）は、いうまでもなく奈良の春日大社（藤原氏の氏神、寺は興福寺）を分祠した大原野神社を歌った歌であり、伊勢物語第七十六段でもおなじみである。源氏物語では、「雪ふかき小塩の山にたつ雉のふるき跡をも今日は尋ねよ」、「小塩山みゆきつもれる松原にけふばかりなる跡やならむ」の歌がみられる。源氏物語では、「行幸」の巻に、冷泉天皇の行幸が描写され、玉鬘が尚侍出仕を勧められ

車で巡る 源氏物語、京の旅(1)

前 兵庫県立川西北陵高等学校
小田剛

るとある。

次は北へ上って、明石君山荘である。ここは、後の亀山殿の地と思われ、(徒然草、『新日本古典文学大系』、第五十一段、第二〇七段)にも、「亀山殿の池に大井河の水をまかせられむとて、」(同一二八頁)、「亀山殿建てられんとて地を引かれけるに、大なるくちなは」(同一二七八頁)と出てくる。今の天龍寺あたりと想定される。大井(堰)・桂川沿いの久世、松尾(対岸の梅津——百人一首七十一「夕されば門田の稲葉おとづれて…」・源経信の、出典の金葉・秋・一八三の詞書「師賢朝臣の梅津に人々まかりて…」——)、桂(桂離宮がある)でもなく、おそらくここであろう。明石君は、曾祖父・中務宮の大堰の山荘を修理して、姫君や尼君と共

に上洛し、そこで光源氏の訪れを待ち(松風)、明石の姫君が後に紫上の手許に引き取られる(薄雲)のである。そして次は同じ、嵐山・嵯峨野の野宮を訪れよう。伊勢斎宮に卜定された斎王が、群行に先立って、潔斎のため一年間籠もる仮宮のことである。娘の斎宮と共に伊勢に下る六条御息所を、光源氏がこの嵯峨野に訪れる場面は、古来名文とされている(葵、賢木)。その北に光源氏嵯峨院があり、現在の清涼寺(嵯峨釈迦堂)に比定されている(松風、若菜上)。さらに西山なる御寺は、仁和寺とされており、先の徒然草にも頻出する寺である。その近くに、源氏物語の桐壺帝北山陵があり、今の童安寺の裏の北方の山付近である。そうしてそこから東へ行くと、大徳寺であり、そこには紫式部供養塔や紫式部産湯の井戸が存在する。さらに千本閻魔堂(引接寺)には、南北朝時代の供養塔があり、紫式部の成仏を願った建立とされている。その南方に七野社があり、ここが紫野斎院である。賀茂の斎院、伊勢の斎宮と並称され(賢木)、かの新古今随一の関秀歌人である式子内親王(生まれは三条高倉・京都文化博物館の地)が、若き十代の十年を過ごした地でも知られる。「郭公その神山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ」(新古今一四八六・雑上「いつきの昔を思ひ出でて」)は、そのゆかりの詠である。そのま北に雲林院があり(賢木)、百人一首の本にも、今の寺の写真が、素

性法師（雲林院に住んだ）の歌二十一「いまこむといひしばかりに長月の…」(なお、この歌については、長夜説、一夜説がある。)と共に記載されるが、昔はそんな小祠ではなく、もっと広大な地であつたのだ。また大鏡の冒頭の、ここ雲林院での菩提講も忘れがたい。そしてこの近く堀川北大路下ル、西側の地に、紫式部の墓あのみなむらが小野篁の墓と並んである。これが紫式部の墓であるというのは、荒唐無稽な説ではなく、ほぼ確かだと考証されている。

さらに北へ行こう。ここは上賀茂神社で、先の式子内親王ゆかりの地であり、かの葵上と六条御息所の車争いの場面は名高い、(葵、藤裏葉)。ここより岩倉へ行けば、北山ながし寺のモデルとして有力視されている大雲寺がある。現在、大雲寺説が有力であるが、鞍馬寺、志賀寺、北山靈巖寺、仁和寺、北山殿辺の神明寺など異説も多い(若紫)。次に浮舟小野山荘へ行こう。八瀬(中心部)と大原との中間辺りとされている(手習)。その東北東が横川の地であり、源信がモデルとされる横川僧都がすぐ思い浮かぶが、ここから車では行きにくい地なので省略する。が、宇治十帖には欠かせない舞台である(手習、夢浮橋)。下つて修学院(離宮)の辺りが、夕霧小野山荘である(夕霧)。伊勢物語、古今集の惟喬親王を業平が訪れる小野も、この辺とされている。「小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。」(伊

勢物語、『新日本古典文学大系』、第八十三段、

一六一頁)。さらに南西に下ると、そこは下鴨神社である。ここは「賀茂の下の御社」(須磨)、『新日本古典文学大系』、十八頁)として出て来ており、南の杜である糺たぎの森も、「うき世をばいまぞ別るゝとまらむ名をばたゞすの神」「糺の森の神」にまかせて」として記されている。なおここには鴨長明ゆかりの河合社もある。ここより南へ下れば、紫式部邸宅跡の廬山寺らぜんであり、その南の四町(約200メートル四方)が法成寺ほうちょうじであり、かつての広大な寺域も、他の遺跡同様、面影はなく、今は一基の碑が立つのみである。荒廢のさまは、徒然草(第二十五段)にも出てくる。その法成寺の南西一町(約100メートル四方)が、紀伊守中川家であり、光源氏が伊予介後妻の空蟬うつせみと邂逅した邸宅であった(帚木)。空蟬に紫式部を見る研究者もいる。その邸の西である、今の寺町通には、昔中川が流れていたのであつた。

そして今の京都人の感覚からすれば、市街・市内は、北大路、西大路、東大路、八条ぐらいまでがはしなのであり、中心は烏丸、四条通といった感じなのであるが、平安京としては、いうまでもなく、朱雀大路(今の千本通)がメインストリート、そして一条、西京極、東京極、九条が四周の計画であつたのだ。その東京極(今の寺町通)のさらに外の河原町通が、今の京都ではもともと地価の高い所(四条河原町)

であるのも、千年の時の流れといえようか。

ここより洛中・市内へ入ることにする。法成寺の西・タテ二町が、あの道長の邸宅の、土御門殿であり、一条帝中宮彰子の里邸として、「秋のけはひ入りたつま、に、土御門殿の有さま、いはむ方なくをかし。」(『新日本古典文学大系』、二五三頁)と、紫式部日記の冒頭にも描かれているのは、よく知られている。その北が清和院・染殿ぞめいであり、「染殿后」「藤原明子」の御前に、花瓶に、桜の花を…」の詞書を持つ古今五十二年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」(春上、前太政大臣・明子の父・良房)の詠は、あまりにも著名である。その南西に鷹司殿(道長の妻・源倫子)があり、その北北西一町に、道長が早く住んだ藤原道長一条邸がある。またその西一町が落葉宮一条邸である。朱雀院皇女落葉宮の本邸で、柏木の死後、その友人夕霧は未亡人落葉宮を見舞う。が、夕霧は雲井雁がいながら、恋心を抱くようになり(柏木)、柏木遺愛の横笛を贈られるのである(横笛)。

(続く)